

ヨエル書とラオデキアのセブンスデー・アドベンチスト教会 - 第21号

Jeff Pippenger

2025-12-31

二十一番

そして、日ごとのささげ物が取り除かれ、荒廃をもたらす忌むべきものが据えられる時からは、千二百九十日ある。ダニエル書 12:11.

1844年10月22日以降、真理の言葉を正しく取り扱おうと望む者たちにとって、預言的な時の適用はもはや預言の正しい適用ではない。11節の1290年の期間は、1844年以降は象徴的な期間として適用されるべきであり、そして1844年以降の適用、すなわち「時」という要素を伴わない期間としての適用は、1844年以前に理解されていたとおりの真理の基礎的理解を保持しなければならない。1290は、まず30、その後に1260が続く期間を表している。1844年以前の理解では、508年から538年までの30年間は、反キリストが538年から1798年まで支配を開始するための準備期間を表していた。

三十年にわたる移行は、パウロが『テサロニケ人への第二の手紙』で扱っている主題である。パウロは「時間」という要素には言及していないが、その三十年のあいだに異教が教皇制へと道を譲るといふ預言的な特徴を指摘している。こうして教皇支配が始まった。時間の要素を伴わない歴史的理解は、聖書の預言における第四の王国から第五の王国への移行を特定し、続いて二度にわたる教皇制による流血の惨事の第一が起こるとする。このことは、第六の王国が竜・獣・偽預言者の三者連合へと移行し、その後第二の教皇制による流血の惨事に至ることを予表している。

その後に予言的な期間が続く三十年の準備は、神が選ばれた民と結ぶ契約の主要な象徴である。三十年にわたる二つの勢力の移行と、それに続く1260年の迫害は、キリストの三十年の準備と、それに続く救いの1260日に一致している。反キリストの三十年の準備は、キリストの三十年の準備を偽って模倣した。三十年の終わりは、洗礼におけるキリストの権能の付与、または538年における反キリストの権能の付与のいずれかを示している。反キリストへの権能の付与は、前の王国からもたらされた経済的・軍事的支援に由来し、キリストに注がれた力も、彼が三十年前に去った前の王国から来たものであった。

二つの期間の区切れ目は権能の付与によって示され、アブラムとパウロが提示した二つの期間の断絶は単純な比較で認められる。アブラムとパウロの30年の区別において、準備期間は契約の過程を表す最初の30年であり、それによってアブラムの子孫はエジプトでの奴隷状態に関する預言を成就する力を与えられた。430年にはさらに象徴的な区分があり、正しく適用すれば最初の215年は神の代表者とファラオによって表される。ヨセフと最初の215年には善良なファラオが、モーセと後の215年には悪しきファラオが対応する。

その区分は、四世代からなる二つの期間を示している。最初の四世代は二番目の四世代に一对一に重ね合わせることができ、その際、預言的なアルファとオメガであるヨセフとモーセが、アルファの良いファラオとオメガの悪いファラオと相互に関わる。この並行的

な考察からは大いなる光が得られるが、ここでは、アブラムの第四世代に関する予告が、430年における四世代の二人の証人を指し示していることを指摘するにとどめる。四世代の二重の表現は、『創世記』四章と五章の系図に見いだされる。系譜の記載の起点をカインとセツと見なすと、セツからノアまで八世代があり、それを中ほどで二分すると、四世代ずつの二つの期間の表現があることがわかる。これは、セツとカイン双方の八世代の系譜において認められる。

第4章と第5章に記された系譜は、その系統の結末、すなわちノアによって締めくくられている。ノアは、虹によって示された、人類に対する神の契約の象徴である。アブラムは、割礼によって示された、選ばれた民に対する神の契約の象徴である。これら二つの契約は常に結び付けられており、ノアの洪水の直後にバベルの塔が描かれる創世記11章に、アブラムへと至る系譜が示されている。そこでは八代ではなく十代である。アブラムへと至る箇所とノアへと至る箇所の双方において、ノア契約とアブラム契約が示されている。

選ばれた民を扱う第十一章の一節で、私たちはそうした世代のうち二つが大いなる光に満ちていることを見いだす。

エベルは三十四歳でペレグを生んだ。エベルはペレグを生んでのち四百三十年生き、息子たちと娘たちを生んだ。ペレグは三十歳でレウを生んだ。創世記 11:16-19。

エベルへの言及は、やがてヘブライ語で「ヘブライ」と同定される語への最初の言及である。選民の系譜では、十人の子孫が挙げられる中で、そのうちの一人は「ヘブライ」と名づけられており、これは選民が呼ばれることになる名称である。三つの節において、エベルとペレグは、選民であるヘブライ民族を区別するしとして用いられている。エベルは「渡る」「渡る者」を意味し、「ヘブライ」という語の語源である。アブラムは、バビロンから約束の地へと渡る者たちの象徴である。「ペレグ」は「分割」「分裂」を意味し、創世記10章25節にあるとおり、ペレグの時代に「地は分けられた」と記されている。

エベルとペレグは、真理の言葉を正しく分けたいと願う人々にとって、預言的な区分を象徴している。ノアの系図は八代からなる二つの系統を示し、それは四代ずつの二組を表している。これはエジプトにおける430年も同様である。創世記11章の系図は八ではなく十で示されている。なぜなら、それは選ばれた民の系図だからである。選ばれた民は五人ずつの二つの群れに分けられ、これにより十人のおとめのたとえと一致する。十人のおとめのたとえは、神の契約の民についてのたとえである。

その選民の系譜において、ペレグの名と彼の歴史的成就是、バベルの塔で地が分割されたまさにその聖書史の時点に、賢い乙女と愚かな乙女という二つの階級の分離を表している。十名の並びの中でペレグは五番目であり、それは十の中心だからである。ヘブライ人エベルはアブラムによって型示され、真夜中の叫びによって二つの階級が分けられるとき、愚かな乙女が渡り越えて賢い乙女となることを表している。名において最初のヘブライ人であるエベルは、契約によって最初のヘブライ人となったアブラムを表している。主がアブラムをバビロンから召し出されたとき、それは真夜中の叫びというメッセージを型示していた。これは、人々をバビロンから呼び出す第二の天使の力の増し加わりである。

十人の乙女のたとえは、エベルとペレグによって表されており、ペレグの分岐線が恵みの戸を閉ざす直前に「出て来なさい」との呼びかけを象徴している。預言的な関係では、エベルはペレグの後も430年生き、ペレグはその後30年生きた。アブラムの三重の契約の第一段階は、エベルとペレグによって表された。アブラムはエベルとして、そしてペレグは二つの階級を分ける分岐線として示された。パウロがアブラムの預言に加えたものは、ペレグがエベルの預言に加えたものに当たる。エベルは400年を告げたが、ペレグは430年を指し示した。ゆえにペレグはパウロを表し、パウロが400年に30年を加えたこと、そしてパウロの務めは聖書預言の「ペレグ」を識別することだった。パウロが識別した聖書預言の「ペレグ」は、民族が文字どおりのものから霊的なものへと分けられることを表していた。

セムからペレグまでは子孫が五人、ルーからアブラムまでも五人である。

彼はアブラムに言った。「必ず知っておきなさい。あなたの子孫は、自分たちのものではない地で寄留者となり、その地の民に仕え、四百年の間、苦しめられる。」創世記 15:13

約束はアブラムとその子孫に対してなされました。『多くの者を指す子孫たちに』とは言わず、『ただ一人を指すあなたの子孫に』と言っており、それはキリストです。私はこう言います。神によってキリストにあって先に確証された契約を、四百三十年後に与えられた律法が取り消して、約束を無にすることはできません。もし相続が律法によるのなら、それはもはや約束によるものではありません。しかし神は、アブラムにそれを約束によってお与えになりました。ガラテヤ人への手紙 3:16-18。

三十歳

イエスは三十歳のときに宣教を始められた。

そしてイエスご自身は、およそ三十歳になられ、人々にはヨセフの子であると見なされていたが、そのヨセフはヘリの子であった。ルカ 3:23

ヨセフは三十歳のとき、エジプトでファラオに仕え始めた。

ヨセフはエジプトの王パロの前に立ったとき、三十歳であった。ヨセフはパロの前から出て、エジプトの全土を行き巡った。創世記41章46節。

預言者エゼキエルは三十歳で預言者としての働きを始め、その働きは二十二年間続いた。

第三十年の第四の月の五日に、わたしがケバル川のほとりで捕囚のうちにいたとき、天が開かれて、わたしは神の幻を見た。エゼキエル書 1:1。

エゼキエルの著作には、他のどの預言者よりも多くの歴史的言及が見られる。エゼキエルの著作には特定可能な日付への直接的言及が十三箇所あり、聖書学者や歴史家たちは、知らず知らずのうちに、彼の奉仕が二十二年にわたったことを確認している。ただし、彼らは二十二という数が十四万四千の象徴であることは知らない。

ダビデ王は三十歳で即位し、四十年間在位した。

ダビデは王位に就いたとき三十歳で、四十年間王として統治した。ヘブロンでは七年六か月のあいだユダを治め、エルサレムでは全イスラエルとユダを三十三年間治めた。サムエル記下 5:4、5

ダビデの四十年の治世は象徴的な数字であり、四十という期間はアブラムとパウロの四百三十年のようなものである。というのも、その四十年は二つの部分（7年半と33年）に分かれているからだ。ダビデの四十年の治世の二つの期間には、さらに預言的な謎が加わる。別の聖書の記述では、その二つの期間を7年と33年としているからである。サムエル記下にある余分の6か月は何を表しているのか、また7年半と33年でどのようにして40年になるのか。6か月の重なりがあり、それは預言的な真理を表していなければならない。

ダビデがイスラエルを治めた期間は四十年であった。ヘブロンで七年、エルサレムで三十三年治めた。列王記上 2:11

22は、神性と人間性の結合を表す象徴的な数であり、エゼキエルの預言活動は二十二年間続いた。ヨセフの十四年間は七年ずつの二つの期間に分かれており、キリストの契約の一週もそれぞれ1260日の等しい二つの期間に分けられている。また、ダビデの四十年の治世も二つの期間に分割され、その二つの期間を結びつける追加の象徴がある。

イエスは預言者であり、祭司であり、王である。終わりの日に、彼は勝利の教会を旗印として掲げる。そしてその教会は、ご自身の神性を人間と結び合わせた預言者・祭司・王であるキリストによって表されており、その人間は預言者エゼキエル、祭司ヨセフ、王ダビデによって代表されている。四つの象徴は、通常よりも七倍に熱せられた炉の中の三人の勇士を表し、そこに第四の方が現れ、その方は神の子のようであった。ネブカドネザルの金の像の祝典には全世界が代表されており、彼らは皆、人間の預言者・人間の祭司・人間の王から成り、第四の神的な方によって支えられている勝利の教会を見た。

サタンは世界を虜にしまった。彼は偶像の安息日を持ち込み、あたかもそれに大いなる重要性があるかのように見せかけている。彼はこの偶像の安息日のために、主の安息日からキリスト教世界の崇敬を奪い去った。世界は伝統、すなわち人間の作った戒めにひれ伏している。ネブカドネザルがドウラの平地に金の像を立てて自らを高めたように、サタンもこの偽りの安息日において自らを高めている。そのために彼は、天の装いを盗み取ってこれにまとわせた。レビュー・アンド・ヘラルド、1898年3月8日。

四という数

預言的なレベルでは、四十はアブラムの四百の十分の一であり、四は四十の十分の一である。四という数に見られるどんな預言的な特性も、四十の象徴性と一致していなければならない。文脈上、四はしばしば「全世界的」を表す。これはよく知られた理解だが、同時に「進行」や、文脈によっては「漸進的な破壊」も表す。

七つのラッパのうち最初の四つは、西ローマ帝国の段階的な破壊を表している。コンスタンティノープルの東ローマ帝国は、オスマン帝国の四人のスルタンへの服従によって終焉を迎えた。東西ローマは、四つのラッパで表される四つの時期にわたり段階的に崩壊し

、さらに第五と第六のラッパにおけるイスラムによっても打ち倒された。この二つの流れは、ラッパの四段階にわたるローマの没落を示す一方で、イスラムとの戦争が激化してイスラムの四人のスルタンが王国に対して覇権を握ったときに最終的な滅亡に至ることを指し示している。西と東の歴史は、330年にコンスタンティヌスが帝国を分割したことに始まる。

西ローマの四つのラッパは330年に始まった。第五と第六のラッパは東ローマを打ち倒す勢力を表しており、東ローマもまた330年に始まった。東ローマと西ローマはともに、538年に教皇権を地上の王座に据える働きに貢献した。それゆえ、西と東の二つの系統は、日曜法において教皇権を再び地上の王座に据えるアメリカ合衆国の二本の角を予表している。預言的關係において、西ローマは教権の象徴であり、東ローマは政治権力の象徴である。

西ローマと東ローマの滅亡の歴史の中に、教皇ローマの歴史が示されている。エペソに代表される弟子たちの教会から始まり、最初の三つの教会は第四の教会へと至り、それは538年から1798年までの教皇権である。黙示録13章では、1798年の致命的な傷が日曜法において癒やされた後、教皇権が四十二か月のあいだ支配すると示されている。1844年以降は「時はもはやない」ので、この四十二か月は、日曜法からミカエルが立ち上がる時までの迫害の期間を象徴している。先駆者たちは、教会、封印、ラッパが、互いに並行して走る三本の歴史の線を表していると理解していた。西ローマの預言的証言を、東ローマの線と教皇ローマの線に重ね合わせることは、ミラー派が用いた預言的適用ではないが、その手法は彼らの確立した理解のいずれとも矛盾しない。

線に線を重ねるように、最初の四つのラッパは第五と第六のラッパが表す歴史の上に重ねられ、さらに、第四の教会が示す教皇制による迫害の時代へとつながる最初の三つの教会の線も重ねられる。第一の線には四つのラッパ、第二の線には四人のスルタン、第三の線には四つの教会が置かれる。「四」という数は全世界を表すが、同時に、世俗権力または宗教権力の漸進的な破壊をも表す。それが何を表すかは文脈によって決まる。

日曜令のとき、教皇権は回復する。教皇制が最初に権勢を得たときには、三十年の準備期間があった。最初の四つの教会では、第四の教会が教皇制であり、第一の教会はエペソとして表される弟子たちであった。キリスト教会の最初の三世代は、イゼベルに象徴される第四の教会テアテラへと至った。テアテラに至ると、538年にオルレアン公会議で日曜令が制定され、これにより、1798年の致命的な傷が癒されることになり、アメリカ合衆国における日曜令が指し示されることになる。

1798年からアメリカ合衆国の「日曜令」に至るまでの歴史は、最初の四つの教会によって表されている。第四の教会であるテアテラは、日曜令とそれに続く教皇制による迫害に当たる。最初の愛を失った教会である第一のエペソは、四段階の漸進的破壊の結末として、テアテラの「日曜令」に行き着いた。テアテラの「日曜令」へと導く世代は、ペルガモの第三世代である。テアテラは恩恵期間の終わりまで続く「日曜令」を表し、ペルガモはテアテラへの道を備える第三世代の妥協を表す。ペルガモの第三世代とそれが象徴する妥協は、321年に最初の「日曜令」を公布したコンスタンティヌスの時代に初めて成就した。アメリカ合衆国はエペソの小羊として始まったが、テアテラを王座に再び据えるとき、

竜のように語る。

アメリカ合衆国の段階的な崩壊は、黙示録の最初の四つの教会によって表されている。聖書預言における第六の王国の段階的な崩壊は、地の獣が竜のように語る日曜法に至るまでの四世代にわたって起こる。最後の世代は、エデンの園と同様に、爬虫類である竜によって表されている。このため、バプテスマのヨハネもイエスも、古代イスラエルの最後の世代を「毒蛇の子ら」と呼んだ。

第四にして最後の世代は、十四万四千人を表す「選ばれた世代」か、その対極である「毒蛇の世代」のいずれかである。一方の階層はキリストの像を形づけており、もう一方は獣-すなわち蛇-の像を形づけている。「毒蛇の世代」は、神の言葉の中で四度、直接的に示されている。各参照箇所本文脈はそれぞれ異なる。

しかし、彼は多くのパリサイ人とサドカイ人が自分のバプテスマを受けに来るのを見たとき、彼らに言った。「まむしの子らよ、迫り来る怒りから逃れよと、誰があなたがたに警告したのか。」マタイによる福音書 3:7

もし「毒蛇の子ら」が、ヨハネが好まなかった二つの宗派の人々についての単なる侮蔑的な言葉にすぎないのなら、その表現について言うべきことは何もないでしょう。しかし、神の御言葉においては一語一語が神聖ですから、ヨハネはサドカイ人とパリサイ人に特定の呼称を与えていたのです。その呼称は、それが述べられている箇所の文脈によって、予言的に定義されています。その箇所では、ヨハネが自らの務めを果たしているとされ、次いでサドカイ人とパリサイ人が登場します。冒頭の節では、ヨハネはイザヤの「荒野で叫ぶ声」として示されています。

そのころ、バプテスマのヨハネがユダヤの荒野に現れ、「悔い改めなさい。天の御国が近づいたからである」と宣べ伝えた。

というのは、この人こそ、預言者イザヤによって言われていたその人だからである。

荒野で叫ぶ者の声がする。「主の道を備えよ、その道筋をまっすぐにせよ。」

そのヨハネは、らくだの毛の衣を身にまとい、腰には革の帯を締め、食物はいなごと野蜜であった。

そのとき、エルサレムとユダヤ全土、そしてヨルダン川周辺の地域から、人々が彼のもとに出て来た。彼らは自分の罪を告白して、ヨルダン川で彼からバプテスマを受けた。ところが、パリサイ人やサドカイ人の多くが、自分の行うバプテスマを受けに来るのを見て、彼は彼らに言った。「まむしの子らよ、来たるべき怒りから逃れよと、だれがあなたがたに警告したのか。」マタイ 3:2-7。

古代イスラエルの最後の世代は、荒野から現れた預言者によって「まむしの子ら」と呼ばれた。ヨハネは、契約の使者のために道を備えるマラキの使者としての役割を果たし、また、イザヤが指し示した「荒野で叫ぶ者の声」でもあった預言者である。

「葉」を象徴として考えるなら、それは「信仰告白」を表していることがわかる。最初の言及はアダムとエバにあり、彼らは自分たちの不義をいちじくの葉で覆った。彼らはかつて光の衣、義の衣をまとっていたが、それが失われたとき、自分たちが裸のラオデキア

人であることに気づいた。ラオデキア人は、「信仰告白」の葉の陰に隠れさえすれば、すべてうまくいくと考える。さらにこの箇所では、ヨハネは、アブラハムの血筋に頼って救われようとするラオデキアのユダヤ人を、はっきりと非難している。というのも、彼らの思い込みは、単なる空虚な「信仰告白」の葉にすぎなかったからだ。人の衣は、その人が何者であるかを表す。

木々は人間や王国の象徴であり、実、枝、種、土、水、根、そして言うまでもなく葉は、それぞれがそれ自体として固有の預言的象徴を表している。しかし、それぞれの真理は、「木」を構成する預言的象徴を用いるさまざまな預言の文脈において表される他の象徴とも結び付いている。もちろん、木の第一の預言的象徴は、それが生死を分ける試練を表すということである。

ヨハネのメッセージは、彼が身に着けていた衣服と、彼が食べた食物によって表されている。古代イスラエルの初めにおけるマナや、終わりにおける天のパンのような、預言的な食物は、食べなければならない。その食物は、人を試す預言的メッセージを表しており、それはキリストの肉とその血であるがゆえに、食べなければならない。ヨハネの着ていた衣服と彼の食べた食物は、キリストのために道を備えたメッセージと、その使者を示している。ヨハネは、キリストのために道を備える最後の使者を型どっている。キリストは契約の使者であり、日曜法において突然ご自分の宮に来られる。それが起こると、愚かな乙女たちは、ラオデキア人であり、また毒麦でもあって、アブラハムの正当な契約の民であると自称する者たちの最後の第四世代を表すことになる。ちょうど、ヨハネが荒野から現れたときに、パリサイ人とサドカイ人がそうであったように。

ヨハネはラクダの毛の衣をまとい、家畜がくびきとともに身につけるような馬具の付属具を備えた革の帯を締めていた。彼は食べ、したがって彼のメッセージはいなご、すなわち聖典におけるイスラムの最たる象徴についてのものとなり、さらにそのイスラムのメッセージを蜂蜜と混ぜ合わせた。

イスラエルの家は、その名をマナと呼んだ。それはコリアンダーの種のように、白く、その味は蜂蜜を入れて作った薄焼き菓子のものであった。出エジプト記 16:31。

マナは神の言葉の象徴であり、その味は蜂蜜のようだった。預言者たちは、彼らが食べるものとして表されるメッセージの味を、その蜂蜜の味だと見なしている。ヨハネはいなごと、ラクダの革と毛で作られた帯によって表されるイスラムのメッセージをもたらした。いなごとラクダはいずれもイスラムの象徴である。そのイスラムのメッセージは、「蜂蜜」として表される神の言葉の啓きと混ざり合っていた。

そこでヨナタンは言った。「父はこの地に災いをもたらした。どうか見てください。この蜜を少し口にしたので、私の目が明るくなったことを。」サムエル記上14:29

ヨハネは単にイスラム教のメッセージを体現していたのではなく、エリヤと同様に荒野から現れた。また、ヨハネが食べたのは蜂蜜ではなく、野蜜であった。というのも、彼はキリストと同様に、その時代の制度で訓練を受けたのではなく、そうした制度にはファリサイ人とサドカイ人のパン種に象徴される、彼ら独自の「蜜」たるメッセージがあったからである。ヨハネは荒野の蜜を食べた。彼は当時の宗教制度の外で、聖霊によって訓

練されたからである。当時一般的な帯には、人が自分のラクダの毛の衣を結び付けるためのヒンジ機構が備わっていた。そのヒンジはヨハネを表しており、彼は地上の聖所から天の聖所への転換点であった。

預言者ヨハネは、二つの経綸の間の橋渡しであった。彼は神の代表として、律法と預言者がキリストの経綸といかなる関係にあるかを示すために立った。彼は、後に続くより大いなる光に先立つ、小さき光であった。ヨハネの心は聖霊によって照らされ、彼が自分の民に光を注ぐことができるようにされた。しかし、イエスの教えと模範から発した光ほど、墮落した人間にこれほどまでに明瞭に輝いた光は、かつても、これからもない。影のごとき犠牲のうちに型として示されていたキリストとその使命は、おぼろげにしか理解されていなかった。ヨハネでさえ、救い主によってもたらされる将来の永遠のいのちを完全には理解していなかった。『時代の望み』220。

ヨハネの要の衣は、まさにキリストの洗礼の時点で登場し、それはヨハネが洗礼を授けていた場所によって象徴される転換点であった。その場所はベタバラと名付けられ、「渡し場」を意味し、古代イスラエルが荒野から出て約束の地に入ったまさにその場所であり、ヨハネも同様にそうした。

もちろん、ヨハネが代表しているのは十四万四千人の運動だが、私たちが単に指摘しているのは、イエスがバプテスマを受けられたとき、イエスとヨハネがその世代を「まむしの子ら」と呼んだということだ。イエスは神の十戒の律法を高く掲げるために来られ、聖書のすべての言葉に靈感を与えられた方であるから、古代イスラエルの最後の世代を「まむしの子ら」と呼ぶとき、第二戒が第三・第四の代において行われる裁きを指し示していることを、十分にご存じなのである。

第三と第四の世代は、第四の世代で終わる段階的な裁きを表しており、それは「毒蛇の子ら」の世代である。キリストの洗礼は9/11を予表している。ラオデキヤ的なセブンスデー・アドベンチストの世代は、その時以来、最後の世代に入っている。ヨハネのパリサイ人とサドカイ人へのメッセージは、ラオデキヤのメッセージであった。

しかし、彼は多くのパリサイ人やサドカイ人が自分のバプテスマを受けに来るのを見て、彼らに言った、

まむしの子らよ、来たるべき怒りから逃れよと、誰があなたがたに警告したのか？

だから、悔い改めにふさわしい実を結びなさい。また、心の中で「私たちの父はアブラハムだ」などと思ってはならない。

あなたがたに言うておくが、神はこれらの石からでもアブラハムの子孫を起こすことができる。

いまや斧はすでに木の根元に当てられている。それゆえ、良い実を結ばない木はすべて切り倒され、火に投げ込まれる。わたしは悔い改めのために水であなたがたにバプテスマを授けるが、わたしの後に来られる方はわたしよりもはるかに力ある方で、わたしはその方の履物を持つ値打ちもない。その方は聖霊と火によってあなたがたにバプテスマを授ける。その手に箕を持ち、麦打ち場をことごとく清め、小麦を倉に納め、もみ殻は消えることのない火で焼き尽くす。

そのとき、イエスはヨハネから洗礼を受けるため、ガリラヤからヨルダン川へ来られた。マタイによる福音書 3:7-13.

イエスはガリラヤから来られたが、これはヨハネの帯の蝶番とベタバラの意味に一致する転換点を象徴している。道を備えるというヨハネの働きは、その時、契約を確証するというキリストの働きへと転じた。三十年に及ぶ準備は終わり、十字架の前後三年半が始まった。

ヨハネのメッセージは、エルサレムの滅びにおいて臨む来たるべき怒りへの警告であり、その滅びはまた、世の終わりと最後の七つの災いをも象徴している。その警告はイスラム教の文脈の中に位置づけられ、それを告げたのは、道を備える者としてのマラキの使者や荒野で叫ぶイザヤの声を成就しただけでなく、エリヤのメッセージも成就した人物であった。というのも、ヨハネの服装がエリヤのそれと同様であったのと同じように、ヨハネのメッセージもエリヤのメッセージに呼応していたからである。

彼は彼らに言った。「あなたがたに会うために上って来て、これらのことばを告げた者は、どのような人であったのか。」彼らは彼に答えた。「彼は毛深い男で、腰に革の帯を締めていた。」彼は言った。「それはテシベの人エリヤだ。」列王記下 1:7、8.

もし彼らが、エリヤではなくヨハネについて「彼はどのような人だったのか」と尋ねたなら、彼らは「毛深い人で、腰に革の帯を締めていた」と答えを得たであろう。ヨハネの六か月にわたる奉仕全体は、最後の第四の世代が具体的に特定され、定義されている箇所において示されている。彼らへのラオデキアのメッセージは、神の契約の民であるという彼らの主張を正面から攻撃し、斧が木の根元を打ち据えるという描写によって、やがて来る怒りを彼らに警告している。そのメッセージには、キリストがヨハネに始まった試しの過程を完成させることになる、ということも含まれていた。のちにマタイでは、イエスもユダヤ人を「まむしの子ら」と呼び、ヨハネの木を切り倒すという主題を受け継いで、その理由を説明している。

木を良いものにして、その実も良いものにせよ。あるいは木を悪いものにして、その実も悪いものにせよ。木はその実によって知られるからである。まむしのすえたちよ、あなたがたは悪い者でありながら、どうして良いことを語ることができるのか。心に満ちているものが口に出るのだから。良い人は心の良い宝から良いものを出し、悪い人は心の悪い宝から悪いものを出す。しかし、あなたがたに言う。人が口にするあらゆるむだな言葉については、さばきの日にその申し開きをしなければならない。人は自分の言葉によって義とされ、自分の言葉によって有罪とされるからである。マタイによる福音書 12:33-37

第二の戒めによれば、裁きの日は第四の世代にある。裁きは私たちが語るメッセージに基づいており、そのメッセージは私たちの心から出てくる。私たちが語るメッセージこそが、私たちがペテロの「選ばれた世代」なのか、それとも「毒蛇の世代」なのかを判別する。キリストが塵を払う者としてご自分の床を掃き清める試練の過程の終わりには、両方の類が現れる。十人の乙女のたとえの油と同様に、そのメッセージは悪い心か良い心のいずれかによって表される。さらにキリストの言及は、この毒蛇の世代、すなわち第四で最後の世代がしるしを求め、彼らに与えられる唯一のしるしはヨナのしるしであると付け

加えている。

そのとき、律法学者とパリサイ人のうちのある者たちが答えて言った、「先生、あなたからのしるしを見せてください。」しかし、彼は彼らに答えて言われた、「悪い、姦淫の世代はしるしを求めるが、預言者ヨナのしるしのほかには、しるしは与えられない。ヨナが三日三晩、鯨の腹の中にいたように、人の子も三日三晩、地の中にいるであろう。ニネベの人々は、この世代とともに裁きのときに立ち上がり、これを罪に定めるであろう。彼らはヨナの宣べ伝えたことに悔い改めたからである。見よ、ヨナにまさる者がここにいる。南の女王は、この世代とともに裁きのときに立ち上がり、これを罪に定めるであろう。彼女はソロモンの知恵を聞くために地の果てから来たからである。見よ、ソロモンにまさる者がここにいる。」マタイによる福音書 12:38-42。

キリストはユダヤ人を「まむしのすえ」と呼び、ヨナのメッセージやソロモンの知恵のメッセージを裁きの例証として用いている。イエスは、文脈と二人の証人によって、「まむしのすえ」とは第四世代のことだと示している。なぜなら、裁きが行われるのは第四世代だからである。

十四万四千人は、終わりの時代の旗印、すなわちしるしであり、それは神の律法や安息日がそうであると同様である。ヨナのしるしは復活のしるしであり、キリストの時代のユダヤ人にとっては、聖霊が鳩の姿で下ったときの主のバプテスマであった。ヨナは「鳩」を意味する。ヨナ、黙示録のヨハネ、ダニエル、ヨセフ、そしてラザロは、通りで三日半のあいだ死んでいたところからよみがえらされる十四万四千人を表している。その時点で彼らはラオデキヤの者からフィラデルフィアの者へと移行し、このようにして「七つに属する八番目」となる。ヨナはバプテスマを表している。彼は水に投げ込まれ、鯨に飲み込まれたとき象徴的に死んだからである。その後よみがえらされたが、それは、煮えたぎる油から引き出されたときのヨハネや、獅子の穴から出されたときのダニエル、穴から引き上げられたときのヨセフ、そしてキリストの時代の封印の奇跡であるラザロと同様である。ユダヤ人は、キリストの復活に示されたヨナのしるしを見抜けなかったが、それはアドベンティズムがヨナのしるしである9/11のしるしを見抜けないのと同様である。

これらのテーマは次回の記事で引き続き取り上げます。

今や、近くにも遠くにもいる神の民に届けられるべき警告の重荷は、第三の天使のメッセージである。このメッセージを理解しようとしている人々は、今日のセブンスデー・アドベンチストを形づくってきた信仰の土台を掘り崩し、その柱を取り除くようなしかたで神のことばを適用するようにと主に導かれることはない。私たちが神のことばに示された予言の筋道に沿って前進してきたとき、順序よく開かれてきた諸真理は、今日においても真理、神聖な、永遠の真理である。私たちの経験の過去の歴史において、一步一步その道のりをたどり、予言の中にある真理の連鎖を見た人々は、光の一条一条を受け入れ、従う備えができていた。彼らは祈り、断食し、隠された宝を探るように真理を求め、掘り下げた。そして私たちの知るところでは、聖霊が私たちを教え、導いておられた。多くの理論が唱えられ、真理らしく見えるものもあったが、誤解され誤用された聖書のことばが混ざり合っていて、危険な誤りへと導いた。あらゆる真理の一点一点がどのように確立され、神の聖霊によってその上に証印が押されたかを、私たちはよく知っている。そしてその間じゅう、「ここに真理がある」「

私が真理を持っている。私に従え」という声が聞こえていた。しかし、「彼らのあとに行ってはならない。わたしは彼らを遣わさなかったのに、彼らは走った」という警告が来た。（エレミヤ書23章21節参照）

主の導きは明確に示され、何が真理であるかについての主の啓示はきわめて驚くべきものであった。天の主なる神によって、一つまた一つと確立された。当時真理であったものは、今日も真理である。だが、「これが真理だ。私は新しい光を得た」との声は鳴りやまない。ところが、預言の領域におけるこうした新しい光と称するものは、御言葉の誤用として現れ、神の民をつなぎ止める錨もなく漂流させてしまう。もし御言葉の学徒が、神がご自分の民を導いてこられた中で明らかにされた真理を受け取り、それを自分のものとし、よく噛みしめ、実際の生活に生かすなら、そのとき彼らは生きた光の通路となるだろう。だが、新しい理論を研究しようと身を入れた者たちは、真理と誤謬が混在したものを抱え、それらを前面に押し出そうとした末に、自分たちの灯が神の祭壇からともされたものではないことを証明し、その灯は暗闇のうちに消えてしまった。『セレクトッド・メッセージズ』第2巻、103、104頁。